



この夏の企画を準備しています。お楽しみに！

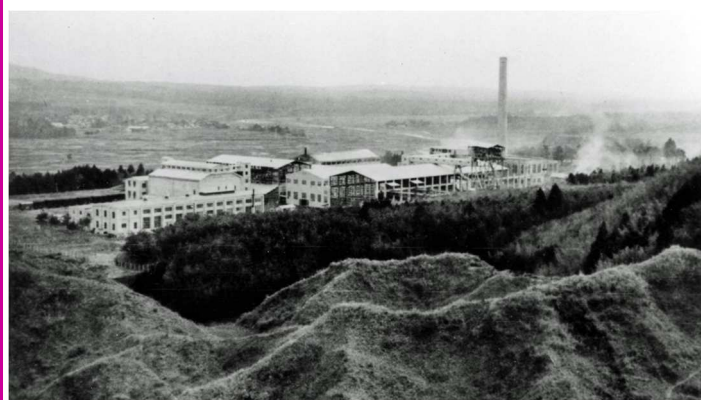
郷土資料館がもとの中里小学校にリニューアルオープンしてから1年と2か月が過ぎようとしています。地元の方、市内の方、そして県外など多くの人に見ていただくことができました。こちらからご説明をさせていただくというよりも、ご自身の懐かしいお話を聞かせていただいたり、一緒になってあの頃のゆっくりとしていた時代を思い出すような会話がほっこりとして楽しく感じます。

ご来館いただいてご好評なのは、「昭和の部屋」です。大正時代から引き継ぎモダンな始まり方をしたものの経済恐慌、戦争、戦後の復興、高度経済成長…などと、「激動の昭和史」と言われるほどに変化の大きかった昭和です。昭和の始まりはもう百年前になるところですが、「ひと昔まえ」として愛着を感じるところです。当館の展示品の多くは「民具」という一般の人々の生活用品ですが、江戸時代から明治、大正、そして昭和30年代までは共通するものがあったり、ゆっくりと少しずつ変化していったものが多いようです。昭和40年代から今日にかけては、科学技術の進歩や生活様式の急激な変化などにより日々大きく進化しているようです。ちょっと昔の昭和のころがレトロで懐かし心情は誰にでもあるのではないのでしょうか。今どきの子どもたちも「カワイイ」って言ってくれます。

今年の夏の企画展は、「貝弁の近代化を進めてくれた企業さん」展と題して、昭和のはじめに静かな農村が活気のある町へと動き出すところを取り上げます。

小野田セメント株式会社 藤原工場

原料立地型の工場の見本みたいな事例です。当初は二つのセメント会社から熱望され、いくつかの地元の地区が地域の要望に基づき交渉・手続きを進めていったことは、「北勢町史」や「藤原町史」に詳しく書かれています。やがて日本の近代化に向けて大量のセメントを出荷し、黒四ダムやセントレアの建設に貢献したことは有名な話です。あわせて地域の発展にも強い影響がありました。



三岐鉄道株式会社

「なんで三岐っていうの?」というご質問が心地いいくらいに、本来的には壮大な計画が三つあり、始まりは明治時代の「太平洋と日本海を鉄道で結ぶ計画」がもとになります。つまり、四日市港から関ヶ原、そして国営鉄道を利用して敦賀港まで結ぶ「本州横断鉄道」の構想がもとになり、最終的に藤原で生産されたセメントを運び出す鉄道として実現して、今日に至ります。



本年度も体験教室を計画しています。夏の終わりには「絞り染めの手ぬぐいづくり」、秋ごろには「竹トンボなどをつくる昭和の子どもたちの遊び」などを考えています。ちょっと昔の生活を再現しながら「心地よい手触り」を感じていただけるように進めていきたいと思っています。ご期待ください。

